
あの日々までの道

sky

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日々までの道

【Nコード】

N3172N

【作者名】

sky

【あらすじ】

工藤新一が黒の組織の手によって幼児化して半年……。FBIの手を借りて組織を潰した新一は、アポトキシンを手に入れ元の姿をとりもどす。

そしてついに、江戸川コナンの関係者たちに自分の正体をあかす。組織が潰れたことにより、危険はなかったため、「工藤新一が幼児化していた」という事件は大ニュースとなって全国に放送される。

・・・しかし、なんと組織には生き残った残党がいた！
はたして新一はみんなを守りぬけるのか？！

カップリングは新×蘭です。 新一目線が主ですが、いろんな人からの目線で書くときも、もしかしたらあるかもです。

はじめに

どうも。 スカイskyです！

コナン大好きです！！小説はコナンばかりかいていきます（笑
未熟者なので、むずかしい表現とかはあまり書けません、自分なりにがんばって
書いていきます。

すきなカップリングは新×蘭です。新×蘭しか書かないので、新×
蘭派の人おすすめてす！
悪いところはどんどん指摘してもらいたいです。
もちろん、良いところも教えてくださると嬉しいです。
よろしくおねがいします。

今回の「あの日々までの道」は、新一が元の生活を取り戻すまでの
日々を

書いていきます。

哀 新一（コナン）のところが少しでてくるかもです！
あくまでも、哀「新一（コナン）ですがww
できるかぎり投稿は早めにします。がんばります。

はじめに(後書き)

コメントありがとうございます^^

期待と不安

- 『確認終了です。残党はいません。どうぞ』

- 『よし。お前たちはアジト周辺を搜索しろ!』

- 『了解!-!』

俺の体が小さくなって半年・・・。

キールこと水無怜奈からの連絡や、組織に関わったある者が所持していた

証拠のフロッピーなどからの情報により、組織のアジトをつきとめた。

そしてFBIの協力でついに組織を潰し、今現在、俺と灰原と博士はFBIと共に

アジトにいた。

ちなみに学校や蘭、おっちゃん達には、

俺と灰原は博士と一緒に、親戚の葬式に出ていると言ってある。

しかし、今はそんなことはどうでもいい。

アジトから探し出さなければ・・・！ 俺の体をこんなふうにした、あの薬を！

哀「・・・で、どうするつもり？工藤君」

コナン「あん？」

哀「FBIが先に薬を見つけ出してしまったら、きっと・・・」

コナン「ああ、持ってっちまうだろうな。重要な証拠品だから」

博士「そうじゃのオ。もしかすると検査なんかもされてしまうかもしれないの」

哀「その前に私たちが見つけ出すには、アジトの建物に入るしかないわよ。」

あの建物は以前、私も組織の仲間だったときに入ってるから、だいたい見当はついてるわ。」

コナン「だが、入口はすべてFBIが固めていて、建物も搜索しているFBIが大勢いる・・・か。問題はどうかやって潜入するかなんだよな。」

コナンは悩むようにボリボリと頭をかいた。

そんな中、哀は「クス・・・」と笑う。

コナン「あんだよ？こんな大事な時に・・・」

哀「あら、さっき言ったわよね？わたしも入ったことがあるって・・・。

組織だって馬鹿じゃないわ。隠し通路くらい1つや2つあるにきまつてるでしょ？

幸運にも、私もそれを知ってるのよ」

コナン「本当か？！灰原！」

哀が言い終わるのとほぼ同時に、コナンは目を見開き哀に聞いたです。

哀「ええ。でも、いつFBIがを見つけ出してしまうかわからないわ。急ぐわよ」

コナン「おう！」

博士「こ、これ哀君！新一君！」

コナン「すまねえ！博士はここで待っていてくれ！なんかあったら連絡するからよ！」

博士「わ、わかった・・・」

俺は灰原の案内で、FBIにみつからないように気をつけて建物に入った。

コナン「・・・で、お前の見当した場所ってどこなんだよ？」

哀「わたしが以前つかっていた研究室よ。」

たぶん、ほかの薬なんかも一緒にいてあるから、みればわかると思うわ」

そういいながら、どんどん狭い通路を進んでいく。

コナン「あ、おい！ その研究室ってここじゃねえか？」

哀「ええ、そうよ。まちがいないわ。ここどこかにアポトキシンがあると思う。」

研究室は意外と広く、ビーカーやフラスコなんかもたくさんあった。

幸い、FBIはまだこの場所に来ていないようだ。

哀「じゃあ、2手に分かれて探すわよ。」

コナン「ああ」

コナン「・・・ん？なんだこれ？」

それから15分ごろたった時、俺は見覚えのある四角いケースを発見した。

コナン「こ・・・これはたしか・・・」

そう。これはたしかに、ジンが俺に薬を飲ませたときに、薬をこのケースにいれていたものだ。

俺は期待と不安が入り混じった気持ちで、ケースを開いた。

期待と不安（後書き）

さて・・・これはアポトキシンののか？！
次はそれが明かされますよ^^

ついに・・・

－ － － － － － － － － 一方、博士の方では

博士「まだかのう。2人とも・・・」

ジヨディ「あ！見つけたわ！ 阿笠サーーーーン！」

博士「おお！ジヨディ先生！ ごくろうじやったのオ」

ジヨディ「ええ。やっと目的が果たせたわ。

・・・あら？クールキッドと赤ずきんちゃんは？」

博士「あ、ああ・・・。2人はちよっくらトイレに・・・」

ジヨディ「・・・そう。」

その時ジヨディは、怪しげな笑みを浮かべていた・・・。

博士「え・・・？」

ジョディ「いえ。無事を確認したかっただけよ。じゃあ私はこれで」

そう言って走り去って行った。

博士（今のジョディ先生なんかひっかかるのオ・・・）

- - - - -
『A P T X 4 8 6 9』

ケースの中に入っていた「それ」には、確かにそう書かれていた。

コナン「アポトキシン・・・4869・・・」

俺はしばらく何が起きたのか分からなかったが、ハッとするとすぐに灰原をよんだ。

コナン「おーい！！ 灰原ー！！」

哀「そんな大声ださなくても聞こえるわよ。で、見つけたの？」

コナン「ああ！！このケースに入ってるやつ・・・そうじゃねえか？」

哀「ええ、確かにアポトキシンよ。じゃあこれを早く・・・」

「持っていないと」と哀が言おうとしたとき、聞き覚えのある明るい声が聞こえてきた。

ジヨディ「ヘイ！！クールキッド！ 赤ずきんちゃん！

こんなところで何してるんですか？」

哀「え・・・？」

コナン「ジヨ・・・ジヨディ先生！！」

ジヨディ「Oh！！ドロボーは駄目ね！ このケース、持っていないこととしてたでしょ？」

ま、まずい・・・！！ 今見つかったら薬は・・・。
こうなったら！

コナン「ジヨディ先生！ たのむ！ これは俺たちにどうしても必要なものなんだ！

わけは後で絶対話すから!!」

ジヨディ「・・・わかったわ。そのかわり、絶対にわけをはなしてもらっわよ。」

コナン「・・・ありがとうジヨディ先生」

俺達3人は、博士のところへ帰って行った。

ついに・・・(後書き)

ついに見つけましたよアポトキシン!!
次回はどうなるやら・・・

いつして

コナン「博士ーーーーー!!」

博士「2人とも無事だったんじゃないよかつ……って、ジョディ先生?!」

博士は、さっき別れたばかりのジョディがここにいることに、心底驚いていた。

それに、さっきのジョディの様子が気になっていたこともあり、「まさか……」と思っていたのだ。

博士「おい……新一君。なんでジョディ先生が……」

コナン「わりい、博士。見つかつちまった……」

ジョディ「クールキッド!! 阿笠サン! なにコソコソ話してるんですかー?」

俺と博士が小声で話していると、ジョディ先生が割りこんできた。

コナン・博士「あ、いや……」

ジョディ「それよりクールキッド! さっきの「わけ」、話してください」

コナン(げ……そうだった。でも、どうせ話すなら、いずれみんなに話すときに

一緒に話した方が・・・)

そんなことを俺が考えていると、灰原も同じことを考えたようで・・・。

哀「それなら、いずれみんなにも話す時が来るから、そのときに聞いてちょうだい。

今知ったところで、変わらないでしょ？」

ジヨディ「・・・そうね。じゃあ、そうさせてもらっわ。

なんとなく分かる気もするけど」

俺にウィンクしながらジヨディ先生はそう言った。

コナン「はは・・・」

こうして俺、灰原、博士は、博士の家へと向かった。

こうして（後書き）

なぜか会話文が多いです。
すいません（汗

解毒剤

コナン「なあ灰原。その薬があれば、もう解毒剤は完璧につくれるんだよね？」

・・・俺たちは今、博士の車で帰っている途中だ。

哀「ええ。でも、今までの試作品より体にかかる負担は何倍もあると思うわ。」

もしかしたら・・・」

コナン「死ぬかもしれないねえんだろ？」

それでも、俺は飲むぜ。もう決めてんだ。あいつを悲しませねえって・・・」

そうだ。たとえ死んだとしても、蘭の涙はもう見たかねえんだ。

そのためにも、解毒剤は飲まなければならない・・・。

博士「ところで新一君に哀君。

どうやって「江戸川コナン」と「灰原哀」の存在を消すつもりなんじゃ？」

コナン「そうだな・・・。俺はとりあえず外国の両親の所へ帰るってことで。」

灰原、おまえは？」

哀「・・・わたし、元にはもどらないわ。」

コナン・博士「え．．．?!」

哀「考えてみたの。「宮野志保」に戻ったところで、私の居場所なんてない。

「灰原哀」のままでいたほうが気楽だつて。

このまま人生をやり直した方がいいって．．．」

コナン「灰原．．．」

博士「哀君．．．。わしは哀君が決めたことなら反対せんよ。

どっちを選んでも、哀君の居場所はわしがおるから．．．」

哀「博士．．．」

コナン「おれもそう思うぜ。

灰原が楽しいとか、居心地がいいって思える方を選べば間違いないよ．．．」

哀「工藤君．．．。わたし、「灰原哀」として生きていくわ。

少年探偵団のみんなもいるし．．．。学校も好きだから」

コナン「そつか。がんばれよ．．．。

今度は悔いがねえように生きるよ」

哀「うん．．．。ありがとう。博士、工藤君．．．」

空にはきれいな夕焼けが広がっていた・・・。

- - -
- - - 博士の家
- - -

俺は「今日は博士の家に泊まる」と、蘭に電話で伝えた。

博士はキッチンで、俺たちのコーヒーをいれてくれている。

灰原はさっそく、アポトキシンのデータを調べていた。

コナン「解毒剤ができるまでどれくらいかかるんだ？」

哀「そうね。だいたい1ヶ月ってところかしら」

コナン「1ヶ月もあれば、俺の存在を消すにはちょうどいいな。

でも、いきなり「コナン」が消えて、「新一」が来たらおかしいよな」

博士「それならわしの家でかくまっておけばよからう。」

そう言いながら、うまそうなコーヒーを出してくれた。

コナン「ありがとう、博士。

だけど、元太たちが博士の家に遊びに来たりしたら・・・」

博士「うーん・・・。それもそうじゃのオ。

どこかに隠れても見つかってしまうかもしれない・・・」

哀「そうだったら、私がインフルエンザで寝込んだことにでもしてあげるわ。

それなら見舞いにもこれないだろうから」

コナン「そうか！ サンキュー灰原！」

俺は元に戻ったら、蘭とどこに行こうとか、なにを話そうとか

いろいろ考えすぎてまともに寝られなかった。

元に戻ってからの悲劇を知る由もなく・・・。

解毒剤（後書き）

たぶんこれから、1日に何個もまとめて投稿する日が多いと思います。

テストとかの勉強がやばいので（汗

俺の存在

- - - - - 毛利探偵事務所

俺は、蘭とおっちゃんに、外国にいる両親の所に帰ることになったことを言った。

3日後に、親が迎えにくると・・・。

おっちゃんは驚いた顔のまま動かない。

蘭は・・・俺をギュッと抱きながら泣いている。

ああ・・・。また泣かせちゃった・・・。

でも、待っていてくれ。元に戻ったら真っ先に会いに行くから・・・。

数分後、泣きやんだ蘭が、

蘭「じゃあ今日はコナンさんの好きなもの作ってあげる！

なにがいい？ ハンバーグ？」

小五郎「お、久しぶりにいいんじゃないか？ハンバーグ！

俺は飲むぞーーーーー！！」

蘭「お父さん！ ほどほどにしてよねー！」

コナン「ありがとう……。蘭姉ちゃん、おじさん……」

聞き取れないぐらいの声で、俺はそう言った……。

- - -
- - 帝丹小学校
- - -

小林先生「みなさん、今日は残念なお知らせがあります。

コナン君が、外国に行くことになりました」

みんな「え……………!!」

元太「う、うそだろコナン?!」

光彦「コ、コナン君・・・」

歩美「そ・・・そんな・・・」

小林先生「コナン君からみんなにメッセージがあります。

コナン君、お願いね」

コナン「はい。僕は3日後、外国にいる両親のところへ帰ることになりました。

でも、この帝丹小学校にきて、とても楽しい日々を過ごすことができました。

みんなのおかげです。

短い間だったけど、ありがとう、みんな・・・。」

クラス中に泣き声が響いていた・・・。

俺の存在は、こんなに大きかったんだ・・・。

俺は少しだけ、「江戸川コナン」を消すことがさみしかった。

俺の存在（後書き）

楽しんで書いています！

別れ

・・・そして、別れの日がやってきた。

昨日、小学校では、クラスのみんながお別れ会をしてくれて、手紙やプレゼントをたくさんもらった。

夜は、探偵事務所で探偵団のみんなも呼んでパーティをした。

今は・・・ 母さんが変装し、「江戸川文代」として俺を迎えに来た。

文代（有希子）「じゃあ、コナンちゃん。みんなにお別れするわよ」

コナン「うん。じゃあね、みんな。いままでありがとう・・・。」

蘭「寂しくなったらまた来てもいいからね・・・。」

コナン「ありがとう。手紙とかも出すから」

元太「これからさみしくなるな・・・。」

光彦「そうですね・・・。」

歩美「歩美ね、コナン君のこと好きだよ！

ずっと言おうとしてただけど・・・なかなか言えなかった。
これからも好きでいていいかな・・・？」

コナン「ああ！ 言ってくれてありがとな、歩美ちゃん。

俺がいなくてもお前らなら、探偵団としてやっていけるさ！
少年探偵団は不滅なんだろう？」

元太「おう！！ おれがリーダーとして引ッ張ッて行くぜ！」

光彦「もちろんです！ 僕も知恵を働かせて頑張ります！」

歩美「歩美も頑張るよ！」

蘭「ほら！お父さんも何か言って！」

小五郎「え・・・？！ えつと・・・その・・・。
まあ、あれだ！ いつでも戻ってこい！」

コナン「うん。 ありがとう！おじさん！

ありがとう！みんな！ あ、それと・・・」

蘭「なあに？ コナン君？」

コナン「みんなに話があるんだけど・・・。

もう少ししたらいずれ話すから、待ってて」

元太「でもお前、外国行くんじゃないのかよ？」

コナン「ああ。でも、待っててくれ。今はこれしか言えない」

蘭「わかったわ。待ってる。元気でねコナン君……」

コナン「うん！」

こうして俺は、母さんに連れられ、博士の家まで来た。

有希子「じゃあ、新一をおねがいします」

博士「ああ。優作君にもよろしく言っといてくだされ」

有希子「分かりました。じゃあね、新ちゃん」

コナン「じゃあな、母さん。また連絡するよ」

有希子「新ちゃん……」

コナン「大丈夫だって！ 絶対死んだりしねえよ……。

俺にはまだ未練が多すぎるからな」

有希子「新ちゃんらしいわね。 優作にそっくりよ。

それじゃ、私は行くわ。 新ちゃんも博士も、元気で」

これでみんなから俺の存在は消えた。

だが、まだ完全じゃない。

完全に消すには、元の体にもどらなければいけない……。

別れ（後書き）

うーん・・・。

なんかよくありそうなパターンになってしまってますいせん。

元体

ある日曜日の朝……。

哀「工藤君……」

コナン「ん……？」

俺は外に出られないから、ここのところ小説ばかり読んでいる。

今も博士に買ってきてもらった推理小説を読みふけていたところだ。

哀「プレゼントよ……。受け取って」

コナン「なんだこれ？」

わたされたものは、小さな木箱だった。

哀「いいから開けてみて」

コナン「あ、ああ……」

戸惑いながらも開けてみた。すると俺は驚きのあまり動きが止まった。

哀「工藤君？　生きてるー？」

コナン「これってまさか……」

哀「解毒剤よ。それも完璧のね・・・」

コナン「よっしゃー！！　ありがとよ、灰原！
でもなんか早くねえか？」

哀「私をインフルエンザの設定にしたのは正解だったようね。
おかげで早く作ることができたわ」

コナン「俺の存在を消して2週間たったし・・・。
もういいよな？」

哀「ええ。死なないでね・・・工藤君」

コナン「ああ！わーてるって！
なかなか俺から連絡がなかったら来てくれよ！」

哀「わかったわ」

俺は工藤邸へと急いだ。

コナン「よし！ 工藤新一用の服も着たし、準備万端！」

これで江戸川コナンともおさらばだ……。

じゃあな、コナン……。

意を決して俺は飲んだ。

すると、たちまち体が熱くなって、骨が溶けるような感覚になる。

ああ、いつもは苦しかったけど……。

今は苦しいっていうよりも、嬉しいの方が大きい。

そんなことを思いながら、俺の視界は闇におちていった……。

．．．．．ん？

そっか、俺、気を失ってたんだ．．．。

新一「あ．．．」

少し声を出してみると、それは「江戸川コナン」のものではなかった。

「工藤新一」のものだ。

時計を見る限り、気を失っていたのは10分程度だ。

新一「灰原に電話すつか．．．」

．．．と、立ち上がることはできたが、歩くことは少し難しい。

重い足を引きずって、電話のところへ行った。

新一「灰原か？　どうやらもどけたらしい．．．」

哀「で、体調は？」

新一「おもったよりも悪くねえ」

哀「そう。それで、これから蘭さんの所へ行くんでしょ？」

新一「ああ・・・。」

哀「本当は休んでろって言いたいんだけど・・・。

言ったってどうせあなたのことだから、行くでしょうし。

でも、無理はしないでね。

前にも言ったけど、試作品の時よりも体に負担がかかってるのよ。」

新一「悪いな灰原・・・。心配かけちまって」

哀「もともと私のせいでこうなったんだから、当たり前でしょ？

あ、それと、言うておくけど、多分1週間は発作が何回かできるとおもうわ」

新一「え？」

哀「それだけ負担がかかってるの。

戻ることはないから安心して。」

新一「わかった。本当のことは明日、みんなを俺の家にあつめて言うつもりだ。

江戸川コナンの関係者にな・・・。」

哀「わたしのことは、わたしから言っわ。

じゃあ、気をつけてね。無理しないで」

新一「ああ。サンキュー灰原・・・。」

電話を切り、
すぐに蘭のところへ走った。

再会

探偵事務所までの道のりが、すごく長く感じた。

多分それは、熱や疲労のせいでフラフラしているからだろっけど、

それだけではない。

嬉しさと、不安のせいだ。

蘭にこの姿で会える。しかも無制限で。

でも受け入れてくれるだろうか。ずっと待たせた俺を……。

何10分もかけてやっと着いた。

「ふう……」と深呼吸して、「ピンポン」と呼び鈴をならす。

今日は日曜日だから居るはずだ。

中から「はーい」と、会いたかった人の声が聞こえる。

がちや

新一「よ・・・よお蘭」

俺はどう対応していいか分からず、そっけなく言う。

蘭「新一・・・ほんとに新一？」

新一「ああ、ただいま。例の事件、片付いたんだ・・・」

蘭「新一・・・新一！ 新一！！」

新一「え！ ちょ・・・／＼／」

いきなり蘭に抱きつかれ、戸惑っていたが

新一「ありがとう。待っていてくれて・・・」

と、言いたかったことを言えた。

その時、

小五郎「なんだあ？ 朝っぱらから……。って、おまえは探偵坊主！」

と、小五郎が出てきた。

新一「あ、おじさん」

小五郎「おい！蘭とくつついてんじゃねえよ！」

新一「あ、わりい蘭……」

離れようとした時、蘭がいきなり俺の額に手をあてた。

蘭「やっぱり……。新一、すごい熱よ！」

新一「そ……そうか？」

蘭「早く横にならなきゃ！入って！」

半ば強引に言われ、しびしび動こうとした・・・が、

ぐらっ・・・・・・・・と視界が揺れた。

新一「え・・・・・・・・？」

蘭「新一！！」

蘭の叫ぶ声が聞こえる。

ハッとすると、俺は小五郎の腕に支えられていた。

新一「あ、おじさん・・・」

小五郎「たく・・・。こんなんで来るんじゃないよ。」

新一「すみません・・・」

新一にはわかっている。こんな言葉も、小五郎の優しさだと。

新一はソファで横になり、小五郎が冷たくぬれたタオルを持ってきてくれ、

蘭がお粥と薬を用意してくれた。

蘭「それにしても、電話くらいくれてもよかったのに」

新一「わりい……。すぐにも会いたくてさ。
ずっと待たせっぱなしだったから」

小五郎「……。で？なんでこんな熱を出したんだよ？」

新一「実は、俺……。みんなに話さなきゃいけないことがあるんです。

2人だけじゃなく、みんなに……。」

蘭・小五郎「え？」

新一「明日、俺の家に来てください。

なにもかも話します……。

受け入れられるか分からないと思うけど……。」

小五郎「そういえば、コナンのやつもそんなこと言ってたな……。」

蘭「そうだったね……。」

新一「それに関係あるんです。だから明日、絶対に来てほしいんです。

蘭、学校は悪いけど休んでくれ。あと、園子もさそってほしいんだ。

それと、妃さんも……。」

蘭「わかったわ」

小五郎「まあ、明日になれば分かることなんだろう？

お前はとりあえず休め」

新一「はい……。」

明日にはみんなにすべてを話す。
どうやって話そうか。

そればかり考え、そして次の日になった……。

再会（後書き）

ぎゃーー！

やっと蘭ちゃんに会えた！よかったーw

正体

次の日……

俺の家に江戸川コナンの関係者をたくさんよんだ。

蘭、おっちゃん、園子、妃、探偵団のみんな、警察関係者、服部、和葉、FBI、

などなど。

もちろん、灰原も博士もいる。

服部には、あらかじめ今からのことを話しておいた。

よし、もつそろそろいいだろう。

新「みなさん、お忙しい中お集まりいただきありがとうございます」

ます」

蘭「新一……」

目暮「おお！工藤君！どうしたんだね？いきなり呼び出したりして……」

新一「今から、重要な話があります。

それを聞いてもらいたかったんです。」

元太「でも、なんで俺らまでよびだしたんだよ？」

光彦「たしか、僕はコナン君の声で呼び出されたはずなんですが……」

歩美「歩美もそうだったよ！」

新一「ごめん。それもいまから話すよ……。

まず、ここに集まってもらったのは、「江戸川コナン」の関係者なんです。」

目暮「た……たしかに……」

新一「そして、その「江戸川コナン」の正体は……僕なんです……」

全員（哀、博士、服部 以外）「え……？！」

新一「これで、僕がいままで姿を現さなかったわけがわかりましたよね？」

これは、僕が、蘭とトロピカルランドへ行った時のことです。
黒ずくめの男の取引現場を目撃してしまった俺は、口封じに
毒薬をのまされ、

目が覚めると、体がちぢんでいました・・・。

俺は最初に博士に相談しました。

『工藤新一が生きているとばれたら、また命を狙われるかも
しない』

と言われ、俺は正体を隠し、黒ずくめの男の正体を掴むため、
探偵事務所に居候することになったんです・・・。」

蘭「で、でも学園祭の時、コナン君も新一も一緒にいたじゃない!」

和葉「そういえばそうやったわ・・・。どういうことなん?」

新一「あのと時のコナンは・・・灰原の変装だ」

蘭「うそ・・・」

哀「ほんとうよ・・・」

元太「灰原?!」

光彦「灰原さん?!」

歩美「あ、哀ちゃん?!」

哀「わたしも本当は小学生なんかじゃないの・・・。
わたしは彼のいう組織の元一員・・・。」

それで、例の薬を作った張本人よ。
そして・・・彼の解毒剤を作ったのもこのわたし」

歩美「そんな・・・」

でもどうして哀ちゃんまで小さくなってるの？」

哀「わたしも飲んだのよ。その薬を・・・」

死ぬつもりでね。

でも、幸運にも幼児化したってわけ。

死のうと思った理由は2つ・・・」

知らず知らずの間に毒薬を作られ、組織が勝手に人に投与していたこと。

もう1つは・・・姉を殺されたこと・・・」

元太「じゃ、じゃあ灰原は逮捕されちまうのかよ?!」

光彦・歩美「え?!」

蘭「警部・・・。どうなんですか？」

目暮「うーむ・・・。難しいところだが、哀君は被害者でもある。
多分だいじょうぶだろう」

元太・光彦・歩美・蘭「よかったー!」

新一「それで・・・。正体を知っていたのは、
博士、灰原、服部、俺の両親、一応キッド・・・」

和葉「え?! 平次知ってたん?!」

服部「ああ。でも、工藤から相談されたわけとちゃうで。

俺がおかしいな」思て、問い詰めたら、見事ビンゴやった
ちゅうわけや」

中森警部「・・・て、キッドも知ってたのか?!」

新一「はい。なぜか知られてました・・・」

光彦「あの・・・それで、さっき言っていたコナン君の声なんです
けど・・・」

いったいどうやって出していたんですか?」

新一「ああ、それは・・・これだよ」

俺は蝶ネクタイ型変声機をだした。

新一「これはどんな人の声でも出せるようになってんだ」

博士「わしが新一君のためにつくったんじゃないよ」

蘭「じゃあ、いつもの電話って・・・」

新一「ああ、これをつかってたんだ・・・」

小五郎「おまえ・・・まさか、いつも推理の途中で

変なところから俺の声が聞こえてくるのは・・・」

新一「それも、これをつかっていました」

小五郎「いつも眠くなって、眠ってる間に事件が解決してるのも・・。

おまえが・・。」

新一「あ・・・いや・・。」

小五郎「いいんだよ。言ってもらった方がありがたいからな」

新一「・・・それは、この腕時計型麻醉銃をつかって眠らせていました」

歩美「これも博士がつくったのね！」

新一「ああ」

高木「じゃあ、いままでの『眠りの小五郎』は
君がやってたんだね」

佐藤「てことは、園子ちゃんのもそうだったってわけね・・。」

新一「ええ・・・。以上が真実です。

それと、解毒剤の副作用が1週間ほどでるそうで・・・。
みなさんには迷惑をかけるかもしれませんがお願いします」

蘭「そつか・・・。それで昨日・・。」

新一「ああ、でもあれは戻った時の影響なんだけど、

副作用はなんていうか・・・、発作みたいな感じになるんだ」

蘭「だ、大丈夫なの？」

新一「戻ったり死んだりしないから大丈夫だよ・・・」

歩美「・・・哀ちゃんは戻らないの？」

哀「ええ。こっちのほうに気が入ってるから」

歩美「よかったあゝ」

新一「あ、ジヨディ先生。

ジヨディ先生もなんとなく知ってたんですね？」

ジヨディ「ええ。でも、まさかあの工藤新一だとは思わなかったわ」

新一「感謝しています。組織を潰せたのもあなたたちのおかげです」

目暮「まさかその組織って、このまえ潰れたアジトの・・・！」

新一「そのまさかです・・・」

目暮「そうだったのか・・・」

園子「あんた、あれだけ蘭のそばにいて、告白とかまだなわけ？」

唐突に聞かれ、おもわずせき込む。

新一「ごほっ げほっ・・・。

な、なんだよいきなり／＼／ げほっ」

園子「その様子じゃまだのようね」

新一（んにやる・・・）

蘭「もー！園子・・・／＼／」

小五郎「告白なんて俺がゆるさん！」

妃「まあまあ、あなた。

新一君、蘭のこと、守ってやってね」

新一「はい！」

やっと正体をみんなにはなすことができた。
しかし、これがあらたな事件を巻き起こす・・・。

正体（後書き）

つ・・・つかれた・・・。

復帰

ピンポーン

蘭「新一〜？ 迎えに来たよ〜！」

新一『ああ！今行くから待っててくれ！』

ガチャリ・・・

蘭「ねえ、新一・・・。もう大丈夫なの？ 熱・・・。」

新一「ん・・・？」

蘭「昨日、正体をみんなに話した時・・・けっこう無理してたんで

しょ？」

新一「はは……。蘭には敵わねえな。

でも今日は大丈夫だよ」

蘭「ほんとにー？」

新一「ああ……。

ただ、副作用はいつでるか分かんねえけどな……」

蘭「気をつけてよ。もしなったらすぐ言ってね」

新一「わーってるよ！」

……って言いながらも、心配させたくねえから分からねえんだけど……。

………帝

丹高校校門前

校門では、なにやら大勢の記者やカメラマンがザワザワしていた。

多分、俺のことだろうな……。

目暮警部が俺の正体を話しても大丈夫か、と聞いてきたから、

「もう組織は潰れたのでいいですよ」って言っちゃったから・・・。

記者たち「あ、工藤君！君があのだ江戸川コナン君だったって、本当ですか？」

あ、そういやキッドの件なんかでも、コナンは有名だったっけ。

新一「はい。また詳しいことは後ほど・・・。

今は授業に遅れるといけませんので。 蘭、行くぞ」

蘭「あ、ちよつと新一く！」

記者たち「工藤君ー！」

ガラッ・・・！と、教室のドアを開ける。

やっと戻ってきたんだ。

この帝丹高校に・・・。

クラスメイト「おつ、工藤！ おまえニュースで言ってたことマジかよー！」

クラスメイト「まさか工藤君が、小学生になつてたなんて・・・」

新一「まあ、本当なら薬を飲まれた時点で死んでたはずなんだからな。

生きてただけよかったぜ」

クラスメイト「そうだよな！愛する毛利とも会えなくなっちまうし！」

新一「ばっ／＼／＼！ なにが「愛する」だー！」

蘭「そうよ／＼／＼！ べつに夫婦でもなんでもないんだから！」

園子「まだそんなこと言ってるの？蘭。

私にはもう、すべてお見通しなのよ？」

蘭「そ、園子ー！」

まったく、復帰早々これかよ・・・／＼／

先が思いやられる・・・。

クラスメイト「あ、工藤。体は大丈夫なのか？」

新一「ああ。1週間くらいは副作用がでるみてえだけど、死ぬようなことはねえよ」

園子「まあ、そうなったら蘭が看病してあげればいいことだしね！」

蘭「も~~~~~!!」

やっと復帰した新一。

しかし、これからとんでもない事件が彼をおそつ……。

復帰（後書き）

夜中なので、ねむいです・・・。

副作用

新一「ふあゝ．．．」

蘭「ちよつと新一、ちゃんと授業受けなさいよ！
今まで全然授業受けてなかったんだから」

新一「ハイハイ．．．」

先生「．．．ということから成り立っており．．．」

キンコーンカーンコーン．．．

先生「．．．じゃあ今日はここまで！

しっかり復習しておけよー」

授業が終わったとたん、教室が一気にざわつく。

新一「やっと1時間目終了かよ・・・。

次、体育でサッカーだったよな？！

ラッキーー！！」

蘭「あ、でも・・・。」

新一「心配ねえって！

灰原だって、運動しても大丈夫だって言ってたし」

園子「ちよつと、2人とも！

もうみんな行っちゃったよ！」

新一「マジ？！ ほら蘭、行くぞ！」

蘭「うん・・・。」

新一「ゴール！」

クラスメイト「あいかわらずうめえな、工藤！」

新一「まあ、コナンになってた時もサッカーやってたしな」

クラスメイト「工藤がいれば楽勝だぜ！！」

向こうでは、女子がさわぎながらサッカーをやっている。

クラスメイト「でも女子と別々なんて・・・。

これほど辛い使命があつていいのだろうか？！」

新一「おまえなあ・・・。たかが体育だろ・・・。」

クラスメイト「たかが体育、されど体育だ！」

新一「……………」

クラスメイト「……ん？ どうしたんだ工藤のヤツ……。」

いつもならもっとツッコむはずなんだけどな……

。」

新一（な、なんだ……？ 急に声が……）

……………と、その時……！！

- - - - - ドックン！

新一「うつ・・・ぐ・・・！」

クラスメイト「え？！ 工藤？どうしたんだ？！」

クラスメイト「おい！大丈夫か？！」

や、やべえ・・・。来やがった・・・。

- - - - - 蘭たちの方

園子「ねえ蘭……。

向こうにいる男子たち、なんか騒いでない？」

蘭「え？」

園子「……ってあれ、新一君じゃない?!」

蘭「し、新一!!!まさか……!」

蘭は考えるよりはやく、新一の方へ走っていた。

園子「あ、蘭!!待ってよー!」

園子も続いて追いかける。

そのうちに、他の女子たちも新一の異変に気付き、駆けていく。

新一「はあ！はあ！・・・ぐ・・・あ・・・」

クラスメイト「ま、まじでやべえって！

救急車よんだほうが・・・」

クラスメイト「今2人が先生呼びに行ってるから待ってる！」

よりによって学校で来るなんて・・・。

みんなに迷惑かけちまうじゃねえか！

少し顔をあげると、むこうから女子が駆けてくるのが見える。

1番前にいるのは・・・蘭だ。

くそ・・・！また心配させちまう・・・。

立ち上がろうとするが、全然足に力が入らない。

クラスメイト「おい！無理すんじゃないよ！」

蘭「新一！大丈夫？！」

新一「あ……う……」

「大丈夫だ」と言いたいのにな、声が出ない。

……そのうちに、先生と、呼びに行ってくれたクラスメイトが走ってきた。

先生「工藤！！ 病院に行くぞ！」

だめだ……。病院に行ったところで変わらない……。

これを処置できるのは灰原ぐらいだからな。

蘭「先生だめです！ 病院に行っても変わりません！」

とりあえず新一を保健室に……」

先生「わ、わかった……。

じゃあみんな手伝ってくれ」

やっぱりいい幼馴染をもつもんだ……。

いざつてときに助けになる。

新一「はあ・・・はあ・・・」

クラスメイト「もうちょっとだから頑張れ！」

新一「わ・・・わりい・・・」

やっと少し喋れるようになった。

保健室につくと、蘭と園子、何人かのクラスメイトが看病してくれた。

俺からの頼みで、みんなには授業を続けてもらった。

新一「おめえらも、2時間目の続き受けてきたほうが・・・」

クラスメイト「なにいつてんだ。」

今はおまえの体の方が大事だろ？」

蘭「そうよ。少しは自分の体も大事にして！」

園子「そーゆう昔から無茶するところ、変わってないわね」

新一「サンキュー……。げほっ！ごほっ……」

蘭「大丈夫？新一……」

そついいながら俺の背中をさすってくれた。

新一「ふう……。大丈夫だ……」

でも、これが1週間続くとすると、正直きついな……」

園子「まあ、これにこりて、すぐに事件に首つっこむのやめなさい。

どれだけ蘭を心配させたら気がすむのよ、あんたは……」

新一「ああ……。こうなったのも俺の好奇心のせいなんだし」

クラスメイト「それにしても、まだ信じらんねえよ。

工藤が幼児化してたなんて……」

新一「俺も最初は信じられなかったよ。

まさか自分が小学生になるなんて……」

蘭「『江戸川コナン』なんて、あんたネーミングセンスないわね……」

新一「しゃーねえだろ?! あれしか思いつか・・・けほっ けほっ
!」

蘭「ほら、病人はちゃんと寝てなきゃ」

クラスメイト「じゃあ、俺ら3時間目受けてくるわ。

終わったらまた来るからよ!

しっかり寝てろよ?」

そう言つて、みんなは教室に戻つていった。

新一「はあ・・・。

まさか学校で来るなんてな・・・」

1週間の間、なるべく外出とかはひかえるか・・・。

さきほどの副作用で疲れがたまっていたのか、急に眠くなり、目を閉じた。

すると、すぐに眠ることができ、たちまち視界は暗転していった・・・。

熱

．．．．．ん？

ああ．．．いつのまにか寝てたのか。

時間的にもうすぐ3時間目が終わる頃だな．．．。

新一「だり．．．。熱でもあんのか？」

そう思って体温計ではかってみた。

ピピッ

新一「げ．．．！39.2！まじかよ．．．。

副作用ってのは熱まで出んのか！」

なんて愚痴を言っていると、

ガラっ！・・・と、みんなが3時間目を終えて来てくれた。

クラスメイト「よお、工藤！ もう起きて大丈夫なのか？」

新一「ああ。 でも今熱はかったら39.2 だった・・・」

クラスメイト「さ、39.2 って・・・。
かなり高熱じゃねえか！」

新一「この副作用は熱も出るらしいな・・・」

蘭「早めに早退した方がいいんじゃない？」

新一「そうかもな・・・。 またなったらヤベーし。

そうさせてもら・・・」

・・・その時頭痛と目眩を感じ、思わずベットに手をつく。

新一「いつて・・・」

クラスメイト「ほんとに大丈夫かよ・・・」

蘭「あんまりうごかない方がいいね・・・。

下校時間になる頃にはお父さん帰って来てるから、
迎えにきてもらおうか」

新一「わるいけど、そうさせてもらう・・・」

蘭「じゃあ、お父さんにメールしとくね」

クラスメイト「お前はそれまでここで休んどけ」

新一「ああ・・・」

- - - - -そして下校時間・・・

蘭「新一〜！ お父さん来たから帰ろ〜！」

新一「ん・・・？ 蘭・・・？」

蘭「あ、寝てた？ ごめんね大声出して・・・」

新一「別にいいよ・・・。じゃ、帰るか・・・」

蘭「ひとりで歩ける？」

新一「大丈夫・・・」

小五郎「・・・お、来た」

新一「すいません……。わざわざ……」

小五郎「しょうがねえだろ。」

そんな状態のお前をほっておけるわけねえんだよ!」

新一「ありがとうございます……」

蘭「じゃあ、今日は私が看病するから、家に泊まっていて!」

新一「え……?」

そこまでとは聞いてないぞ……。

蘭「じゃあ新一、とりあえず熱はかつて」

そう言つて体温計をわたされた。

・・・ピピピッ

新一「・・・壊れてんじゃねえか？ これ・・・」

蘭「え？ なんで？」

新一「だって、どう考えてもおかしいだろ！

40・1 なんて・・・」

蘭「よ、40・1 ？！」

小五郎「なに騒いでんだ？」

小五郎が車を止め終わって、帰ってきた。

蘭「新一、熱が40.1も・・・」

小五郎「おいおい・・・。

そりゃ、病院行った方がいいだろ」

蘭「・・・解毒剤の副作用なんて処置できる医者いないわよ」

小五郎「そりゃそうか・・・」

新一「灰原も、こればかりは仕方がないって・・・」

蘭「でも心配ないわ！

私がしっかり看病して、治してあげるから！」

新一「蘭・・・」

ピリリリリリ・・・

新
一・蘭・小五郎「え……？」

事件

突然、新一の携帯が部屋に鳴り響いた。

新一「はい。工藤新一ですが・・・」

目暮『おお！ 工藤君！ 今どこに居るのかね？
家に居なかったようなんだが・・・』

新一「あ、はい。今はちょっと毛利探偵事務所に・・・」

目暮『そうだったのか！ それだったらちよいどいい！
毛利君にも電話しようと思っていたんだよ』

・・・そうだった。 目暮警部たちには今日の事言っていなかった
け。

新一「・・・事件ですか？」

目暮『1丁目で殺人事件があったんだよ。
今から毛利君と来られるかね？』

行きたいのは山々だけど、蘭が許してくれるかどうか・・・。

・・・。

ぜってー無理だな・・・。ま、聞いただけ聞いてみるか。

新一「あ、ちょっと待っていてください。目暮警部・・・。

・・・ってなわけで、蘭。行ってもいいか？」

蘭「だ、だめに決まってるでしょ！」

新一「・・・だよな・・・。」

予想どうりだ・・・。

小五郎「・・・俺も行くんだから、たいしたことねーだろ」

蘭「なに言ってるのよお父さん!!」

新一は安静にしていけないといけないんだから!!」

新一「・・・すぐ戻ってくるから・・・ダメか・・・?」

蘭「も〜。事件と聞いちゃ飛んでっちゃうんだから・・・。

・・・じゃあ、時間制限は夕食ができあがるまで!

過ぎたら戻ってきてもらっからね」

新一「え・・・? いいのか?」

蘭「どうせ、事件と聞いて黙ってるなんてできないんでしょう？
まあ、お父さんもついていく事だし・・・。
でも無理しないでね」

新一「サンキュー！　蘭！！」

俺は、目暮警部に行くことを告げ、おっちゃんと共に1丁目へと向かった。

事件（後書き）

今日は少なめでごめんなさい（汗

s k yからのアンケート!!

突然すいません！ アンケートです

こんなことしてる暇があったら、続きかけよ・・・って感じが（汗

でも、なんとなくアンケートをしてみたくなりまして。

では、さっそく1問！

Q1

気に入っている映画は？

s k yはですねー。今回の「天空の難破船」です!!

キッドにいいところ盗られてしまい、すこしコナンがかわいそうでしたがww

殺人無しだったので、推理もあまりなかったです（笑

ま、そこは許してあげて・・・。

でも、ギャグシーンいっぱいラブコメもいっぱい？ 楽しかったです！

Q2 コナンとコラボしたらおもしろそうなマンガは？

ルパン三世とかとコラボしてましたよね？ あれ、おもしろくてよかったですw

「めぐりあう2人の名探偵」っていう、金田一とコラボしたゲームがあるんですが

ストーリーがおもしろかったのでアニメ化希望！！ です

。なんかよく、「ハヤテのごとく！」にコナンの銅像がある気が・・・

・・・なんなんでしょう、あれww

Q3 組織のボスは誰だと思う？

skyは阿笠博士があやしいんですが・・・。

作者がそれは否定してるらしいので・・・。

でも実際、アガサ・カクテルって酒あります!!

しかもジン&ウォッカで作れます!!

工藤優作がボスって説もありますけど・・・笑

みなさんは誰だと思いますか？

この3つの問いに教えてください^^

おねがいします

心配

- - - - - 車の中・・・

新一「あの・・・おじさん・・・」

小五郎「ん？　なんだ？」

新一「目暮警部たちには今日の事、言わないでもらえますか・・・？」

小五郎「・・・なんでだよ？」

新一「その・・・心配かけたくないですし・・・。

絶対「帰って休んでろ」って言われちゃいますから・・・。」

小五郎「そりゃそうだろうな。

でもお前のその頼みを聞くことはできねえ」

新一「え・・・？」

小五郎「これで無理して、また蘭に心配かけさせてみる？

こんどは容赦しねえからな」

・・・おっちゃんの言うとうりだった。

蘭にこれ以上心配はかけさせないようにしねえと……。

新一「……そうですね。

僕も蘭には、もう心配かけさせたくないですし……。」

小五郎「もし警部殿に帰れって言われたら

俺が適当に何か言ってやるからよ」

新一「はい……わかりました……。

あと、1つ聞きたいんですけど……。」

これは大体予想はつくが……。

小五郎「なんだよ」

新一「蘭に心配かけさせたくないなら、

なんで「お前はここで寝てろ」って言わずに
連れて来てくれたんですか？」

小五郎「蘭と2人きりになるなんて、この俺が許さねえからだ」

や、やっぱりな……。

- - - - - 事件現場

小五郎「目暮警部殿——!!」

目暮「おお、毛利君に工藤君!

すまないな、わざわざ来てもらって・・・」

新一「いえ・・・」

でも、僕はもう少ししたら帰らないといけません・・・」

目暮「え? なにか用事でもあるのかね?」

小五郎「いや、こいつちよつと熱がありましてね。

蘭が夕食までには帰ってこいつて・・・」

佐藤「それって、例の薬の副作用なの?」

目暮警部のほかに、佐藤刑事や高木刑事も来ているようだ。

新一「ええ、まあ・・・」

高木「大丈夫なのかい？」

それだったら帰って寝ていた方が・・・」

小五郎「こいつがどうしても行きたいって聞かないんだよ」

それはそうだが・・・。
おっちゃん、あんたも連れてきただろ・・・。

目暮「熱はどのぐらいなのかね？」

警部が心配そうにたずねてきた。

新一「あ、いや・・・。

一応さっきは40・1で・・・」

目暮・佐藤・高木「よ・・・40・1?!」

新一「でも、そんなにキツくないんで・・・。
心配いりませんよ」

佐藤「く、工藤君・・・？そういう問題じゃなくて・・・」

高木「君がこうやって普通に歩いてるのも不思議なくらいだよ・・・」

新一「ほんとに大丈夫ですから。

静かに調査しますし・・・」

目暮「しかたない・・・。

じゃあ君はなるべく安静にしてるんだよ、いいね？」

新一「はい・・・」

・・・その頃蘭は、黙々と夕食を作っていた・・・。

心配（後書き）

もうすぐ夏休みがおわってしまう・・・（泣
いやだ~~~~ 31日までです

夏休みって楽しいですね・・・。
、。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3172n/>

あの日々までの道

2010年10月8日22時27分発行